

花 き

実 況

1 キ ク

坂井は、春植え 6 月咲きギクの草丈が 50～70cm である。7 月～8 月咲ギクも灌水不足で草丈が低い。現時点で 7～10 日早い。病虫害は 6 月上旬に露地でアブラムシ類中発、クロゲハナアザミウマが少発生である。

奥越では、6 月 9、10 日に J A テラル越前キク部会の作見、6 月 13 日に越の花生産組合の作見が行われた。目揃え会はキク部会が 6 月 25 日、越の花生産組合が 6 月 21 日に行われた。秋植え夏ギクが、6 月 1 日から共選出荷、6 月 6 日から市場に出荷された。

本年度の暮れ植えギクは、総じて芽立ちが悪いことに加え、4 月中下旬の高温により全体的な生育はここ数年間で最も早い。

病虫害の発生は 6 月上旬にシロシタヨトウが発生し、中旬にオオタバコガ 2 令幼虫が発生したが、個体数は少ない。その他の害虫として、キクキンウワバ、グンバイムシ、シャクガ、キクスイカミキリが少発生。白さび病、黒さび病は 2 か所の圃場で見られた。

福井の春植え 8 月咲きギクの 6 月 9 日調査では、草丈が福井市南部で「小鈴」38cm(40cm、前年 6 月 12 日調査)、「小雨」52cm である。福井北部の草丈は 6 月 9 日の調査で「小鈴」40 (40)cm、「花絵」48 (50)cm である(昨年 6 月 12 日調査)。病虫害では、福井市でカメムシ類、アブラムシ類、白さび病の発生が見られ、特にアブラムシ類の発生が目立った。



永平寺では 6 月 9 日調査で「夕霧」37cm (40cm)、「はじめ」42cm(51cm)、アブラムシ類中発生、被害が見られる(昨年 6 月 11 日調査)。

丹生では 6 月 15 日調査(前年 6 月 12 日調査)で、春植え 8 月咲きで「はじめ」55cm(56cm)、「秀水」55cm(50cm)、「小鈴」55cm(前年 55cm)、である。5 月の乾燥から生育は回復しており、昨年と同程度の生育となった。病虫害は、カスミカメムシ類、アブラムシ類、ダニ類、ハモグリバエ類、白さび病がみられる。

写真 コアオカスミカメムシ

越前市は 6 月 5 日調査(前年 6 月 12 日調査)で、春植え 8 月咲きで「翁丸」55cm(37cm)、「小鈴」33cm(40cm)、「はじめ」45cm(42cm)、「小雨」70cm(56cm) である。小ギクは前年より草丈が長い傾向である。病虫害は、アブラムシ類、ダニ類がみられる。

二州の春植え 8 月咲き小ギクの草丈は 6 月 16 日調査(前年 6 月 17 日調査)「山手白」21.2 cm (昨年 42.2 cm)、「小鈴」34.2 cm (昨年 43.6 cm)、「広島紅」36.4 cm (昨年 58.0 cm)、「ともこ」24.8 cm (昨年 54.4 cm) となっており、定植が遅くなったため生育は遅れている。9 月咲きギクの「わかさ」は 3 cm (昨年 12.1 cm) とかなり遅れている。病虫害では白さび病、アザミウマ類の発生がみられる(敦賀市)。

若狭の秋植え夏小ギクは、6 月 16 日調査(昨年 6 月 19 日調査)の「はじめ」が草丈 117.8 cm、立弁(昨年 73.8 cm、蕾径 6.2 mm)、「とび丸」が草丈 108 cm、立弁(昨年 66.0 cm、蕾径 5.0 mm)となっている。春植え 8 月咲きギクは、「翁丸」が 40.6 cm (昨年 43.2 cm)、「くれない」が 40.0 cm (昨年 37.6 cm)、「さきかぜ」が 38.2 cm (昨年 43.6 cm) となっている。9 月咲きギクは、「妖精」が 13.2 cm (昨年 5.0 cm)、「みゆき」が 5.4 cm (昨年 1.7 cm)、「楽園」が 12.0 cm (昨年 1.0 cm) となっており、生育は早い。病虫害は、アザミウマ類が中発、アブ

ラムシ類が少発である。カメムシ類による心止まり症状が目立つ(小浜市)。

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリでは、「F₁オーガスタ」の4月定植実生苗が、6月8日調査(前年6月5日調査)の露地栽培で葉数12枚(14枚)、抽台はしていない。

福井ユリの生産者は福井市、永平寺町、坂井市、あわら市、鯖江市で10名が栽培しており、4月26日から6月8日まで出荷が続いた。昨年から、5月上旬の母の日に向けて開花時期を早めた作型を導入する生産者が増えている。今年は約1万本の出荷。

あわら市の3月30日定植のカサブランカは93cm、43枚で6月下旬開花予定。

福井市の「リリブライトレッド」は、6月9日調査では草丈110(110)cmで収穫終了である(前年6月11日調査)。鯖江市の据置露地栽培の「リリブライトレッド」は、6月12日調査では草丈100cmで5月25日から出荷が始まり、6月11日まで出荷された。生育のバラツキが見られた(前年6月11日調査)。

3 スイセン

スイセン球根の改植は6月に実施され、約4aの圃場を改植中である。促成栽培は6月より開始され、平坦地で栽培を行っている生産者が出荷時期の拡大を目的に導入している。養成球根の掘り上げは5月下旬から始まり、6月上旬から本格的になった。

4 トルコギキョウ

坂井の抑制栽培の2度切り栽培の「ロベラシリーズ」の草丈は70cm(6月12日調査)で、出荷最盛期を迎えている。8月の抑制栽培予定圃場では太陽熱消毒を行っている。

大野市では、ロジーナシリーズ5~7対葉、草丈25cmとなっている(6月9日調査)。

南越では6月5日調査で11月上旬定植の「プチフル」シリーズ、「ロジーナ」シリーズ、「フルフルバイオレット」の草丈が70cm(85cm)である(前年6月11日調査)。4月上旬定植の「モレットマリン」「ブライダルスノー」の草丈は25cmと昨年並みである。

二州では、6月16日調査(前年6月17日調査)美浜町の5月下旬に定植された「ロジーナシリーズ」などの品種が、草丈1~4cm(昨年2~3cm)となっている。

若狭では、「エクローサホワイト」「あすかの舞姫」などが5月下旬~6月上旬にかけて定植されている。

5 その他

福井のヒマワリは6月9日調査で、4月26日播種の作型が56(55)cmとなり生育良好である(前年6月11日調査)。

永平寺の5月初旬に直播されたヒマワリ「ビンセントオレンジ」「ビンセントクリアオレンジ」「ビンセントクリアイエロー」は6月9日調査で、草丈70cm(60cm、前年6月11日調査)である。アブラムシ類が少発生である。

丹生では、ベロニカが約300本出荷された。

対 策

1 梅雨期の圃場排水の徹底

梅雨期の長雨が続くと、根の障害が発生する。そこで、畝の再整備を実施し、冠水しやすい圃場で栽培している場合は、畝溝とこれに交わる集水溝、排水路の溝さらえや清掃、除草を十分に行う。

逆に、乾燥気味の気候が続いている場合は畝間灌水を行う。下葉の 1/3 が朝方から萎れている状態であると、畝間灌水を行う必要がある。夜温が高いときは畝間灌水をなるべく行わない。

実施前に溝さらえ、通路の清掃、土寄せ等を行い、スムーズに水が走るようにする。

畝間灌水は、圃場が湿田で排水が悪い場合に走らす程度、そうでない場合は通常の灌水を基準とするが、夕刻～早朝までとし、明朝の 10 時には完全に水がおちているようにする。

2 梅雨期の病虫害防除の徹底

1) キク黒さび病

梅雨期の湿潤な季節に多発する。白さび病と異なり、比較的高温でも発生が続くため断続的に発生が続く。日当たり、風通し、排水をよくする。病葉は見つけ次第摘除する。治療剤としてはマネージ乳剤しか登録されていないため、予防剤として有機硫黄系剤（兼商ステンレス、ジマンダイセン水和剤、エムダイファー水和剤）の散布を励行する。兼商ステンレスは薬害に注意する。

2) キク黒斑病・褐斑病

発生は、降雨との関係が強く、摘心後に降雨が多い場合に早くなる。高温多湿の条件下で感染が拡がり、降雨等による土壌の跳ね上がりも下葉への感染が助長されるため、例年被害が多い品種は、梅雨前に下葉かきを行う。病葉は、二次感染を防ぐため、見つけ次第摘葉し、圃場外で処分する。生育初期にダコニール 1000、ストロビーフロアブルやベンレート水和剤の散布を行う（表 1）。

表 1 登録のある薬剤例

殺菌剤名	希釈倍率	使用回数	備考
サンヨール乳剤	500倍	8回以内	薬害注意、有機銅剤、部会リストにあがっていない
ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	3回以内	白さび病にも登録があるが、耐性菌に注意。
ダコニール1000	1,000倍	6回以内	耐性菌出にくい。
ベンレート水和剤	2,000～3,000倍	6回以内	

3) ハダニ類

梅雨明け後の乾燥する夏場に発生が多くなるので、梅雨の期間中に 1 回と梅雨明け前に 1 回散布すると効果がある。薬剤の連用によるダニ類の薬剤抵抗性を抑えるため、系統の異なる殺ダニ剤を使用し、生育密度が低い時点で殺卵効果のある薬剤を散布する。圃場の周辺の除草を行い、圃場内への侵入と繁殖を抑制する。特に、下葉の裏に十分薬液がかかるよう、斜め上向きに噴口をむけ散布する。

4) カスミカメムシ類

秋植えの 6 月咲きギク等の未収穫株が発生源となるので、圃場内に花を残さない。羽のない幼虫が多くを占めると思われる 6 月中下旬にローテーション防除を行う。

特に蕾や花に成幼虫が集中するので、蕾や花がついたものは注意する。

防除薬剤はスミチオン乳剤、ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤、）がカメムシ類に登録がある。日中になると成虫の飛翔が活発となるため、早朝に防除を行う。

3 夏秋ギクの品質向上対策

1) 追肥

止め肥の施用時期は開花時期から約 50 日前ぐらいであるので、施用後、梅雨時期の

降雨が多い年では、生育後半に肥料が切れる場合がある。葉色が落ちた場合は、速効性の化成肥料を少量施用する。ただし窒素肥料が効きすぎると白さび病が発生しやすくなるのでやりすぎない。

2) 下葉かき

薬剤散布しても地際部の葉裏には十分に薬液がかからない。さらに病害に侵されている場合は、感染源として残りやすい。風通しをよくして、ムレを防ぐとともに、病害の下葉からの伝染を防ぐため、全体長の5分の1程度の下葉を除去する。除去した葉は圃場に放置しないで、圃場の外へ搬出する。

ハモグリバエ類幼虫の食害痕が黄変している場合は、必ず葉をとりのぞき、圃場外で処理する。

3) 開花促進方法

ジベレリンの水溶液を散布することで、キクの開花が促進される。花首がのびやすい品種には用いない。登録された使用方法を守る。

剤名	対象作物	使用濃度	使用時期	使用方法及び注意事項
ジベレリン水溶剤 ジベレリン液剤	キク	25～ 100ppm	生育期	茎葉散布 50～100ℓ /10a、使用回数2回以内。

4 スイセンの管理

1) 促成栽培の球根管理

斑点病の発生がひどかった圃場の球根はなるべく用いないようにする。高温処理、くん煙処理後はできるだけ涼しい納屋などで保管する。乾腐病等の病害が発生している球根は適時取り除く。

2) 促成栽培の定植後の管理

発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブなどによる散水を行うとともに遮熱ネット等での減光、敷きわら設置で地温を極力低下させる。

3) スイセン葉先枯病がひどかった圃場では、太陽熱消毒を実施する。甚大な被害があった部分に透明マルチを被覆し、土などを掛けて密閉し、梅雨明け後から1か月程度行う。

5 ストックの播種と育苗

1) 播種

平坦地では7月下旬播種を目安に準備を進める。発芽適温は20～25℃の涼温を好むため、酷暑期は発芽が悪くなる場合がある。特にアイアンシリーズは発芽が悪くなる。

2) 播種用土

清潔で粒子の細かく揃ったものを準備し、覆土は発芽を揃えるため均一な厚さにする。用土中の肥料分を少なくすると、葉色が薄くなって、鑑別がしやすくなる。

3) 八重鑑別

八重率を高めるため、必要な苗数の3倍量程度の種子数を播種する。セル成型トレイに播種する場合、2～3回鑑別する。第1回目は、播種7～8日後に発芽が遅れたラッパ型の奇形葉を抜く。2回目は淡い葉色で子葉が長く、大きいものを残す。最後の3回目は生育不良株を除去する。

4) 播種後の管理

雨よけ下で行い、高温対策のためにハウスの外側に遮熱ネット等を張る。育苗箱は

ベンチ等の上に置き風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。

5) ストックの苗立枯病と苗腐病

立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。苗立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病（ピシウム菌）の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。

6) 直播栽培

播種時の地表面の温度を極力下げるため、70～80%の遮光資材をハウスの外側にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように絶えず灌水する。徒長防止のため、発芽したら、遮光資材を5～7日以内に取り除く。

6 ハボタンの播種

- 1) 7月上中旬にセル成型トレイ 200 穴やペーパーポットを用いて播種する。高温期の播種では、遮光 30%程度で行うが、徒長しやすいため、かん水は必ず午前中に行い、遮光ネットをこまめに開閉する。
- 2) 切り花の場合、播種 14 日、本葉 2 枚程度の若苗で定植を行うと草丈が伸びる。直播は、12～15cm ネットの枠に 2 粒落とす。
- 3) 鉢物ハボタンの場合、子葉展開後に、ビーナイン水溶剤 200 倍液（施設栽培のみ）を茎葉散布すると節間の伸長抑制ができる。

鉢物ハボタン

剤名	対象作物	使用濃度	使用時期	使用方法及び注意事項
ビーナイン水溶剤 80	鉢物ハボタン (施設栽培)	200～400 倍	子葉展開後	茎葉散布 50～150 ℓ /10a、使用回数 2 回。